

『子規全集』未収録・自筆漢詩拔萃写本

―王荊公詩註・劍南詩鈔・歳晩類集

加藤 国安

凡例

- 一、子規自筆写本「王荊公詩註」「劍南詩鈔」「歳晩類集」（法政大学子規文庫蔵）の翻刻を行う。
- 一、子規の写本は、正字・異体字・書換字・略字を縦横に混在する。子規の古典文献の文字理解の実態を知る上でもまた書き癖や筆跡を知る上でも貴重であることから、できる限り原本のまま翻字する。
- 一、その際、『子規全集』（講談社版）第八・九巻の漢詩の部の「凡例」を参考とする。当時は活字の関係で相当苦勞されたようだが、現在、漢字の専門ソフト「今昔文字鏡」（ここで使用したのは漢字十六万字版 エー・アイ・ネット社 二〇〇九年）を用いると、かなり忠実に翻刻することが可能である。
- 一、文字フォントがない場合は、下段の備考欄に偏や旁について説明を掲げる。
- 一、子規原本の行数・字数・割注も原状のまま翻刻する。

○王荊公詩註

法政大学子規文庫蔵写本。昌平坂学問所官板『王荊文公詩』五十卷(宋・李壁箋注 天保七「一八三六」刊 全八冊)があるが、これには「評」がない。子規の披荇には「評曰」があり、これと同一なのは、『王荊文公詩』五十卷(宋・李壁箋注／宋・劉辰翁評点本であることが確認される。また批点の箇所・種類を同本(清綺齋 抛元本重印／後跋(乾隆辛酉、海塩・張元濟／名古屋大学所蔵本)と照合すると、注記したものを除いては同一である。

王荊公詩註

題燕侍郎山水图

往時濯足瀟湘浦、評曰、造意如畫、独上九疑尋二女、蒼梧之野

烟漠々、評曰、恍惚入玄、断隴連岡散平楚、暮年傷心波浪阻、

不意画中能更覩、評曰、收拾不易、他人六句三折則促矣、此独有餘、燕公侍

書燕王府、王求一革終不悞、奏論讞从誤当死、全活

至今何可数、仁人義士埋黄土、祗有粉墨归囊褚、評曰、

忽盡黯然亦是起語已絶付之瀟湘少不為乏○國史燕公判刑部奏天聖三年、天下断大辟、二千四百三十六、豈無法可疑情可憫者、而州郡無所奏口、蓋畏罪也、請自今奏而不應奏者、不可以罪、自是奏口者除千人、無不貸免自始至今、所活無慮幾千万人矣、

卷一

隴の旁…龍と写す。傷の旁…「易」。

子規、「除」のように筆写。劉辰翁評は

「餘」。余…「余」。革…筆の書換字。悞

…與の交換略字。从…「死」。死…「赦」

の誤写。なお批点は第一句にゴマ傍点

がないのを除けば、他句の批点「○」

は同一箇所。□…「讞」。「讞者除」…「讞

者歲除」の誤写。

杏花

石梁度空曠、

評曰、楚々
有素歷

茅屋臨清炯、

俯窺嬌饒、杏、

未覺

身勝影、

言花影倒
水中尤佳

嬌如景陽妃、

含○笑○落○宮○井○

陳後主
避隋軍、

同張麗華、

孔貴嬪、入景陽

宮井中、

故此稱景陽妃、

悵○有○微○波○

殘○妝○壞○難○整○

評曰、初看身影甚樸、

末意風情殊別、殆是絕唱、

末

句言水波而花影乱、

○錢起詩、惆悵驚啼、孤雲還

光宅寺

昔雲光法師講法華經于光宅每日
華如飛雪滿空而下講訖即升空而

去

翛然光宅淮之陰、

扶輿独来坐中林、

千秋鐘梵已變

響、十畝桑竹空成陰、

昔人倨堂有妙理、高座翳遶天

花深、

高座寺亦載雲光講法華天
花散落今講經臺遺跡尚存

紅葵紫萼、復滿眼、

往事無跡難追尋、

望鐘山

佇立望鐘山、

陽春更蕭瑟、

暮尋北郭歸、

故遶東岡出、

評曰其詩每欲為蕭
然更勝思索

卷一

評杏…脫落を補ったもの。

含…含の国字。落…墮に作る。

□…嶺と筆写す。批点の箇所・種類、
劉辰翁本と同一。

卷二 毎日…毎有に作る。

坐…坐の書換字。

畝…畝の異体字。

卷五 其四 鐘の金…「余」。

批点の箇所、同一。

雜咏八首之一

羔豚窘虎豹、鳩雀窮鷹鷂、巧者具機弋、鷙猛還拘拏、
論功莫如神、論大莫如天、悲哉區々人、乃欲逃其間、

鳩・鷹・鷂・鷙の鳥：「鳥」。
批点の箇所、同一。

○劍南詩鈔

法政大学子規文庫蔵写本。清・楊大鶴編『劍南詩鈔』とほぼ一致する。国会図書館・東大総・内閣文庫等に、康熙二十四年刊本あり。ほかに『宋詩鈔初集』第三冊にも「劍南詩鈔」一卷（清・吳之振・呂留良・吳自牧選）があるが、収録数が少なくこの子規の筆写作品とは合致しない。

劍南詩鈔

岳池農家

春深農家耕未足、原頭叱々兩黃犢、泥融無塊水沕
渾、雨細有痕秧正緑、緑秧分時風日美、時平未有差
科起、買花西舍喜成婚、持酒東鄰賀生子、誰言農家
不入時、小姑画得城中眉、一双素手無人識、空村相

七言古

原…原の略字。融塊「沕」は「沕」。塊

…塊

喚看縑絲、」農家農家樂復樂、不比市朝爭奪惡、宦遊
所得真幾何、我已三年廢東作、

和范舍人永康青城道中作

風驅雨壓無浮埃、驂驪千騎東方來、勝遊公自輩王
謝、淨社我已追宗雷、岷山樓上一徙倚、如地始闢天
初開、廓然眼界三万里、山一蠲堙水一杯、世間幻妄
幾變滅、正自不滿吾曹哈、丈夫本願布衣老、達士詎
畏蒼顏催、君看神君歲食羊四万、処々棄骨高成堆、
西山老翁飽松麴、造物賦予何遠哉、

思故山

千金不須買画图、聽我長歌々鏡湖、々山竒麗說不
尽、且復為子陳吾庐、桺姑廟前魚作市、道士莊畔菱
為租、一弯画橋出林薄、兩岸紅蓼連菰蒲、」陂南陂
北鴉陣黑、舍西舍東楓葉赤、正当九月十月時、放翁
艇子無時出、」船頭一束書、船後一壺酒、新釣紫鱖魚、
旋洗白蓮藕、」從渠貴人食万錢、放翁癡腹常便々、暮
归稚子迎我笑、遥指一抹西村烟、

看…看の国字。得…得の俗字。

埃の矢…「失」。驂・驪・騎の馬…「馬」。
岷…岷の書換字。關の門…「」と写す。

滅…滅の略字。

骨…骨の略字。

遼…遼の書換字。

金…金。鏡…「金十竟」。

桺…柳の俗字。

楓の旁…風と写す。

暮…莫に作るのもあるが、楊大鶴…暮。

烟の「因」の大…犬に作る。

吳娘曲

鏡奩蚕出千黑蟻、釵梁梅小双青豆、吳娘十四未知
愁、羅衣已覺傷春瘦、「間尋女伴過西家、闌草归来日
已斜、睡睫濛々嬌欲閉、隔簾微雨壓楊花、

示兒

舍東已種百本桑、舍西仍築百步塘、早茶采尽晚茶
出、小麥方秀大麥黃、老夫一飽手扞腹、不復举首号
蒼々、讀書習氣掃未尽、燈前簡牘紛朱黃、吾兒從旁
論治乱、每使老子喜欲狂、不須飲酒径自醉、取書相
和韋琅々、「人生有病有已時、独有書癖不可医、」願兒
力耕足衣食、讀書万卷眞何益、

鏡・釵の金…金。

傷の旁…「筭」。間…閑に作る。闌の門

…「門」。斜の余…「余」。睡…「目」+「睡」。

桑…「桑」。

扞…捫の略字。

有病…百病の誤写。楊大鶴…百病。

○歳晩類集

法政大学子規文庫蔵写本。明治十六年、子規が初めて上京した年の暮れに、頼山陽・大沼枕山・高啓ら十余名の漢詩六十首を筆写したもの。当時の子規の心境を理解する上で貴重である。出典についても調査したが、明確に特定することは困難であり現時点で分かった範囲で記した。句点・批点は朱書する。

表紙

歳晩類集

子規文庫に『山陽詩鈔』あり。但し第一冊（巻委一・一二）、第四冊（巻七・八）のみ（第二・三冊欠）。また『山陽遺稿』『唐詩選』『三体詩』『宋詩別裁集』『高青邱詩醇』等あり。以下、各本との照合を注記する。なお同文庫には『瀛奎律髓』上下冊も蔵されるが、中冊を欠く。「歳晩」詩を収めるのは「節序類」だが、これはその中冊に所収される。本「類集」中、数首が含まれるが、よって確認は取れない。

歳は歳の交換略字。類は類の俗字。

五言古

臘月廿六日訪信侯分坐上所有為韻余得燈

賴 襄

殘年僅五日、九衢累雪氷、人忙我得閑、攜酒問吾朋、
吾朋無僮僕、調食坐復興、謂君且莫爾、此事非君能、
徵逐豈無伴、朱門酒如澠、不如從吾黨、世路謝峻嶒、
蔬菽足侑醉、街鼓已寥々、餅中水仙夢、吐香夜清澄、
論文品千古、聊共同此燈、

殘歲感舊

長 三洲

昔我童稚時、遇事皆歡喜、不知徂歲悲、只待新年至、
中牟稍識愁、年序始如矢、無端落兵塵、身立劍盾裡、
生死在朝暮、春秋不復記、忽々十來年、經過如夢寐、
爾來又十霜、官況逆旅似、四十六年客、頭顱可知耳、
依然歲暮心、悵如別鄉里、豈無來茲年、難有今日晷、
志士惜流年、我無飛騰志、老人戀餘景、吾境行近此、
上有双老親、下有双女子、瘦妻獨拮据、送迎謀且備、
有酒可以餞、有魚可以饋、一年何是道、悠々千古事、

『山陽遺稿』卷三

忙…「」(扁で心の略字)＋亡(旁)「

と写す。無…無の書換字。

子規所藏本では、第十五句から末句まで批点あり。

出典不明。

眉欄に、「仲村敬宇云四十六年／頭顱可知耳余長／於君備□憂患／而双親久已(以下、判読できず)扁有力」。

除夜

賴子成

妻償旧債了、兒着新衣来、貧家粲洒掃、燈火亦彫明
合家相喚坐、煖杯聊同傾、一病不死旧顔面、又与梅
花重相見、

七言古

赤間関守歳詞

賴 袞

南船北船盡歌呼、繫纜買魚餞歳祖、客樓雪霰壓燈
火、吾亦撓炉傾白墮、半生飄泊趁風檣、一醉何處非
家郷、自有縞綦関心緒、守歳旧寓輟機杼、靈犀一点
海山遥、酒醒燈凍聞雁語、

歳晚書懷倣誠齋

大沼 厚

嗟呼我不飮、爲五斗米折腰向蒼郵、又不飮、纏十万
錢策鶴上楊州、天涯淪落青衫故、空見滔々歳月流、

『山陽詩鈔』卷七

来…成に作る。誤写。第一二句の批点、
子規藏本も同じ。眉欄に「茶山云如無
意思而鍛鍊不疎」と墨書する。子規藏
本に「茶山云」はなし。

『山陽詩鈔』卷四

盡…尽の略字。祖…徂の誤写。霰の雨
…「葦」。炉…爐に作る。飄の旁…「風」。
檣の回…「回」。靈の雨…「葦」。眉欄「茶
山云子成詩豪／氣横絶一世而風懷之作
柔麗如此／猶坂上將軍喜則／仏怒則夜
又也」「又云繫纜作沽酒／似可」。
なお「夜又」…『山陽詩鈔』本のママ。
批点、原本になし。

『枕山詩鈔』卷上 丁酉

舊…督の異体字。策…乗の書換字。

滔…滔の略字。流…流の俗字。

馳馬試劒心摧折、為農為商何湏説、一枝枯葦一短檠、哦詩長做秋蛩声、忘是忘非忘窮達、不將三公換一褐、噫我如鳩夫、蠢拙不為居、待他鵲巢成、聊且僦一區、無儋石儲猶自若、經是堪炊史堪酌、史酌經炊朝復朝、未應餓死轉溝壑、

五言律

除夕君彝來同守歲

賴 襄

當我相思夕、知君來宿心、孤燈歲共守、兩鬢霜同侵、
鄉上粉榆遠、京城鐘漏深、較存慈母在、閑意信浮沈

冬暮齋中

大沼 厚

忽々歲云徂、圖書獨自娛、日透硯冰薄、雪融檐溜粗、
酖詩欺沉叟、嗜酒類辛迂、靜窓香一炷、危坐孳僧趺

除夜宿石頭驛

戴 叔倫

旅館誰相問、寒灯獨可親、一年將尽夜、万里未歸人、
寥落悲前事、支離笑此身、愁顏吟衰鬢、明日又逢春

馳の馬…「馬」。

鳩・鵲の鳥…「鳥」。

經の旁「ス十土」。堪…「堪」。

批点、『枕山詩鈔』（『詩集日本漢詩』第十七卷所収 汲古書院）になし。

『山陽遺稿』卷五 除の余…「余」。

鐘の金…「金」。深…深の仏字。

『枕山詩鈔』卷中 壬寅

融の鬲…「鬲」。

酖…耽に作る。叟（叟）…瘦の誤写。危

…危の書換字。孳…學の国字。

子規藏『三体詩』（横刊本）卷一。「旅館」

の上に「、」と朱書す。批点はなし。

同（写本）には書跡なし。除の余…「余」。

館…館の交換略字。吟…與の国字。

除夕客中與家兄守歲

高青邱

雨雪透村中、猿鳴旅館空、守爐銷夜漏、停燭待春風、
有恨能催老、無文鮮送窮、却憐今夕酒、還得弟兄同、

臘月廿四日雨中夜坐

身退惟宜靜、謀疎且任真、樓空三日雨、書亂一牀塵、
邱隴多良友、江湖獨放臣、莫嗟年景暮、轉眼是新春

除夕

宋唐庚

患難思年改、龍鍾惜歲徂、閑河先壟遠、天地小臣孤、
吾道憑酒溫、時情付擁爐、南荒足妖恠、此日謾桃符

七言律

臘日

郭子章

臘日三年為異客、今年霜雪未曾饒、風塵暗滿淮南
路、霧雨寒生江上潮、鄉夢有時逢骨肉、此身何處托

『瀛奎律髓』所收。

子規文庫藏『高青邱詩醇』卷三。批点、
なし。除の余…「余」。漏の雨…「雨」。

『同』卷三で前詩のやや後にあり。臘
の旁…「𦵏」。

隴の旁…龍。

子規文庫藏『宋詩別裁集』卷四、批点
なし。『瀛奎律髓』所收。「時情」を「詩
情」に作る『律髓』本もあり。壟の旁

…龍。憑…憑の略字。荒…荒の俗字。

明の人、名…奎。出典不明。

霜・霧の雨…「葍」。曾…一に全に作る。

樵…「椎」。

漁樵、共來吳楚交兵地、烽火依稀似六朝、

除夕

吳鶚

長稚均叨一載安、低吟淺酌共盤桓、瓦瓶春透暑蘇
煖、石鼎香銷栢子寒、無恨世紛多掌、那知天運又
更端、迎新送故須臾事、不倦挑坐夜闌

除夕進退韻

賴山陽

休論烏兔如跳丸、開宴全家且解顏、老婦製衣聊整
楚、嬌兒學步尚槃跚、詩成酒醉酒醒裏、歲換燈明燈
暗間、韓叟木強甘世笑、送窮未必說寒酸、

歲晚感懷

大沼枕山

莫笑窮陰膽氣粗、閉門裏飲酒添逋、貴交誰免負心
責、高興我追当面娛、傘不遭時宜學隱、才非濟世諱
言儒、良图堪羨英雄漢、博塞狂豪餞歲徂、

除日

終日昏昏泥酒觴、任他債主厂成行、一枝有筆梅添

出典不明。鶚…「罌十鳥」。

『山陽詩鈔』卷六

聊…聊の本字。

原本に批点なし。

叟…叟の俗字。

『枕山詩鈔』卷下 己酉

裏…轟の略字。

傘…命の異体字。隱…隱の書換字。

原本、批点なし。

『枕山詩鈔』卷下 庚戌、除の余「余」。

譜、半畝無田鶴欠糧、短景其如歲云暮、高情仍是古之狂、天隨遺業吾能繼、好向貧中号後王、

歲晚書懷

門冷如冰歲暮天、衡茅林麓鎖雲烟、牀頭旧曆無多日、鏡裏春風又一年、枝拙未成求舍計、家貧只用賣文錢、寫來揀取新詩句、市酒猶能祭浪仙、

碌々還驚馬齒新、固窮未死果何回、久無顏面向鄉友、豈有歌詩驚世人、濁酒過牆聊補醉、寫錢掛杖且裝貧、春風又到衡門下、仍旧清時一逸民、

失路從來無所宜、天公憤々更堪疑、歲云暮矣今存幾、道豈非邪欲問誰、浩蕩避人鷗殞浪、伶仃怖影鵲依枝、思量只合騰々醉、桎梏何堪蒼故知、

滿瓦繁霜夜氣凝、撓簾危坐更稜々、杉頭弯影初弦月、竹裏斜光半暈燈、栗里先生窮似蝨、香山居士拙于僧、殘年贏得多清事、潭水烹茶手碎冰、

云に「コ、ニ」と右訓あり。
原本、批点なし。

『枕山詩鈔』卷上 己亥

鎖雲烟…鎖寒煙に作る。以下、この詩に原本は批点なし。鏡・錢の金…金。寫…間に作る。

驚…「敬十馬」。

寫…間に作る。

民…民。「ミン」と右訓あり。

矣の矢…「失」。

邪は耶に作る。鷗・鵲の鳥…「鳥」。殞

…「没」。枝に「エダ」の右訓は汚れの

ため。騰の馬…「馬」。知の矢…「失」。

瓦…瓦の国字。弦…絃に作る。

斜の余…「余」。

烹…「亨十」。

歲晚寓楊雜唸二首

眞樂元知在曲肱、怕他官路日競々、春來猶作無家客、病起全如有髮僧、獨卧夢寒松寺雪、孤吟影瘦草庵燈、喧々舉世趨勢利、長守林泉我獨能

讀書有味夜焚膏、透戶風尖裂敝袍、霜壓几翎清月瘦、雲摩對背碧天高、功名兩字只爲累、文史三冬何太勞、世亼与愁俱不尽、暫時拋撇就樽醪、

歲晚雜感

人事勿々歲籥更、寄居蕭寺若爲情、薄雲輜月慘無色、疎木漏風寒有齿、愁裡嬾看新曆冊、貧來只對舊燈檠、何当辨得湖中宅、梅鶴相携過一生、

功名博得一閒眠、范釜生塵亦偶然、毳衲蒲團仍故我、梅花雪片又新年、只銷杯裏忘憂物、敢乞人間造孽錢、自笑身謀迂濶甚、欲將破硯当良田、

除夜

『枕山詩鈔』卷上 庚子

路…路の書換字。

勢…聲の誤写。二首、原本に批点なし。

霜の雨…「雪」。

對…樹の古字。

亼…事の交換略字。

『枕山詩鈔』卷上 辛丑

雲・漏の雨…「雪」。

齿…声の交換略字。

鶴…鶴の俗字。携…「推+乃」。

忘…忘の本字。

二首、原本に批点なし。

同前、除の余…余。

青燈照影笑支離、熱不日人乃尔癡、心跡高閒飛倦鶴、交遊零落著殘棋、行藏且付盈觴酒、哀樂都歸一卷詩、終歲奔忙何所得、春來仍欠草堂貲、

歲晚書感

衣上塵埃歲欲窮、客蹤何事尚飄蓬、慈親衰髮添新白、遊子愁顏減旧紅、征路山川猶臘雪、故園松竹又春風、因循未作歸來計、病在寒山万木中、

除夜

百般心事五更天、無限悲觀集目前、呈笑瓶梅陪冷飲、尽情燈火照孤眠、不材空愧逢昭代、多難猶欣過厄年、故態今宵除未得、春來貧病兩依然、

歲晚雜咏

到頭誰似野人閒、曉枕安眠病更頑、鴉影未翻霜裡、
討鐘聲先出霧中山、火殘炉底星三点、氷結瓶心玉
半環、占暖黃紬情思好、也勝騎馬趁朝班、

倦の旁…卷。

零の雨…卮。觴の易…易。

原本に批点なし。

『枕山詩鈔』卷中 壬寅

原本に批点なし。

『枕山詩鈔』卷中 癸卯

瓶…「并十瓦」。

愧の旁…「鬼」。

態…「觥十心」。除の余…「余」。

『枕山詩鈔』卷中 甲辰

誰…孰に、裡…裏に作る。霜・霧の雨

…「卮」。鐘の金…「金」。瓶…「并十瓦」。

騎の馬…「馬」。

不覺流光遍遍歲除、焚香閒對一窓塵、家貧且免身為客、晝短何妨夜讀書、憂悶有時呼杜酒、辛勤何日卜韓廬、千秋青史平生願、枉道功名念已疎、

歲暮雜感

依田百川

峰嶸世路幾經營、復到殘年百感生、縱爾青雲方抱志、無如白髮遂無情、枯蒲滿岸風威肅、寒月一天霜氣橫、知是金龍山寺近、沈々隔水送鐘聲、

客舍歲暮

高啓

空江寒雨送淒涼、離舍無多即異鄉、井臼尚勤慙德曜、音書未至憶平陽、心輕別歲憑年少、夢喜還家及夜長、自笑病來詞賦拙、懶從枚叟客遊梁、

乙酉除夜

賴 襄

寒燈孤館不須眠、周歲悲歡瞑目前、腐鼠嚇鵠供獨笑、老牛舐犢有誰憐、斗升終癩屈雙膝、四十唯驚過六年、商畧一杯娛現在、蠟梅花下且陶然、

覺…覺の俗字。遍…遍の誤写。除の余…「余」。厘「(虚の書換字)…「厘+丘」。ともに原本、批点なし。

出典不明。

経の旁…「入+土」。雲・霜の雨…「雨」。

金…金の俗字。鐘の金…金

子規文庫『高青邱詩醇』巻四、この巻四の三十余首に朱の句点あり。本詩には句点・批点なし。軽の旁…「亠」。還…還の俗字。懶の旁…「賴」。梁…梁の略字。

『山陽詩鈔』巻八

子規本に朱の句点あり。鵠の鳥「鳥」。笑…咲に作る。膝…膝の国字。驚の馬…「馬」。蠟の旁…「嵐」。眉欄に「小竹云第三似添至頸聯則自然」。子規本は「小

歳晚有感

归展在高松

久保得

歳月堂々去似流、携家天外久□□、老而無斃子終
獨、窮不尤人有隱憂、千卷讀書非我用、半生業功与
讐謀、夜寒襲枕眠難得、今日帰郷亦客遊、

五言絶句

除夕客中憶女

高 青邱

別家非願久、回首已徂年、今夜寒齋雪、何人聽折絃、

七言絶句

除夜作

唐 高 適

旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然、故郷今夜思千
里、霜鬢明朝又一年、

竹」を「又」に作る。

□□…虫食いで判読できず。「無斃子終」
を、子規「S」の修正記号で、「無子終」
斃」と入れ替える。襲…「龍」。眉欄に
「棕園（國？）評合作／冲堂評全玉／撫
松評滿胸鬱拮之气／待詩而始斃／吉本
復堂評前聯正仙／又評真情真詩非他題
／詠所詠／春海評全沈鬱懷／慨老兄作
中听希見」。

子規文庫『高青邱詩醇』卷五、除の余
…「余」。

子規文庫『唐詩選』卷七、批点なし。

除の余…「余」。以下、同じ。

霜の雨…「霈」。鬢…鬢の略字。

歲晚書事六首 原口
十首

宋 劉克莊

書生元不信機祥、老去無端慮事詳、
白髮社巫來報吉、明朝渌井更苦墻、

門冷如冰促不妨、由來富貴屬蒼々、
誰能却學癡兒女、深夜潛燒祭竈香、

歲晚郊居苦寥寥、日高塩路去城遙、
深々榕徑苔墻裏、忽有銀釵叫賣樵、

主公晚蒞治家寬、婢僕奴驕驕令難、
圃在屋邊慵種菜、井臨砌畔怕澆蘭、

日々抄書懶出門、小窻弄筆到黃昏、
了頭婢子忙勻粉、不管先生硯水渾、

勻客鶉衣立戸前、豈知儂自窘殘年、
染人酒媪逋猶緩、且送添丁上芻錢、

『後村詩鈔』卷下(文政元年 陽華堂刊)

と一行の字数同じ。字体もほぼ同じ。

□…稿?慮…慮の書換字。來報、諸書、「云日」に作る。何に拠ったか、待考。

寥…寂の国字。

叫…叫の書換字。樵…「椎」。

驕…號の異体字。

勻…丐の異体字。

除夕

明

汪道昆

沈水香燒宝鴨空、長筵酒煖蠟燈紅、可憐万戸千門裏、斷送華是曉鐘、

除夕

程嘉燧

久客懷人 百事慵、春歸幾日是殘冬、長安雪後無來往、報國門前獨看松

歲暮

賴山陽

一出鄉園歲再除、慈親消息定如何、京城風雪無人伴、獨剔寒燈夜讀書、

除夕

為客京城五餞年、雪聲燈影兩依然、爺孃白髮應添白、說着吾儂共不眠、

除夜

寒燭光消猶吐烟、酒醒街柝伴愁眠、平頭四十驚吾

一例に、『統皇明詩選』卷下(国会図書館蔵、正徳五年刊)に一行の文字数や字体同じ。批点の箇所、不同。断…断の略字。

「人」の次は余白。一例に、『珮文齋詠物詩選』(国会図書館蔵、諸本)卷四十八・除夕類にあり。程嘉燧は明人。國の「或」…「戎」。

『山陽詩鈔』卷一 辛未
子規藏本に、自筆の朱点あり。

『山陽詩鈔』卷二 乙亥
眉欄に「機云白香山」。子規本、全句に刻本上の批点あり。

『山陽詩鈔』卷五 己卯
烟の大…「太」。

老、何況明朝又一年、

除夜

生兒自壁慰遠遊心、燈底呱呱伴醉吟、說着吾儂併說汝、遙知老母坐宵深

除日

紛々帳簿婦当家、殘歲真如赴壑蛇、不問計餘幾許眼、眼前有酒有梅花

除夕寄協

故園鶴髮又加年、鴨水霞関並各天、三処相思汝尤遠、寒燈應獨不成眠、

除夜下谷新居書懷

五首_{二節}

大沼 厚

八竿湖海浪遊人、今夜終收漂泊身、偈仄莫嫌方寸地、明朝便是我家春、

當門寧著五株柳、沿砌聊存一樹梅、把古人詩差自

『山陽詩鈔』卷五 庚辰

壁…慰の誤写。

深…深の古字。

『山陽遺稿』卷四 己丑 子規本、全

句に刻本上の批点あり。壑…「壑+全」。

餘の余…「余」。

『山陽遺稿』卷六 辛卯 同右。

霞の雨…「雨」。

『枕山詩鈔』卷中 甲辰

終…纔の略字。

樹…樹の略字。

慰、茅檐猶勝竟無家

未詳

藥餌香中晝掩扃、從他歲事太忙生、
掃塵終了又春餅、卧聽 冬磔々聲

除夜

菅茶山

放孳經旬靜掩閑、病懷唯在□待春還、探囊計尽、
今年、什何日閑於除日閑、

除夜祭詩後有作

鈴木邦

一字推敲枉費功、年來我漸悔雕蟲、
可憐三斗間心血、吐向酒悲詩瘦中、

歲晚出城二首

牧 古愚

兒童放孳闌柴閑、歲杪人忙我正閑、
及時且理郊行策、欲訪梅花索笑顏、

除夜

森田居敬

梁川星巖「歲晚偶興」(『星巖丁集』卷

五 戊戌)

聽の下は余白。子規本では「冬冬」。一
行二十一字。

『黃葉夕陽村舍詩』卷七 丁丑

『松塘詩鈔』卷一

年來…詒符、漸…亦、間…閑に作る。吐
…嘔に作る。

寛政八、嘉永二年。『牧野黙庵松村遺稿』

卷四 甲午?及…乘に作る。

索…閑に作る。顏の「シ」「一」。

文政二、元治二年。『玉池吟社詩』一集

醉吟守歲自從容、送旧迎新一夜中、不妨天明篇未就、好將後半付春風、

戊寅除夜作

長梅外

今年亦復夢中過、人与物華俱代謝、唯有碧翁情甚佳、半輪明月照除夜、

玉関寄長安李主簿

唐岑参

東去長安万里餘、故人那惜一行書、玉関西望腸堪斷、況復明朝是歲除、

除夜

陳簡齋

一盃歲酒莫留殘、坐看新年上鬢端、只恐梅花明日老、夜瓶相對不知寒、

除夜作

賴山陽

細君拮据鬢蓬麻、婢辨辛盤僕掃家、獨有主翁無一事、出從郊路覓梅花

四 森田居敬。

長谷梅外（名は允^{まこと}）文化七（明治十八

年。甚…甚の書換字。眉欄に「秋月橋門

評云趣向□新亦実事」。天理図書館蔵「ノ

ート20」に「梅外詩鈔」を録す。

子規文庫『唐詩選』卷七。訓点のみ、

批点なし。

餘の旁…「余」。

『宋詩鈔』卷四三 題下に「次大光韻

大光是夕婚」とあり。盃…杯、歲…節

に作る。

『山陽詩鈔』卷八 甲申

婢の下、余曰。眉欄に「茶山云能言」。

子規本に「茶山云」なし。郊…邨、梅

…楳に作る。

歳暮有感

渡 松斎

戎馬倉皇向甲陽、干戈歳暮事猶忙、常山忽逐長蛇
去、未問鯨鯢驕近洋、

裏表紙

癸未十二月抄写

莞尔生

天保十二（明治三十八年）。眉欄に「蘿谷
云常山子巧借用砂甚／又云滿胸感慨」。
鯢の旁に「児」。

癸未は明治十六年。莞尔生は子規の号。
子規、十七歳の時に抄したもの。子規
の漢詩創作にとって貴重な詩囊となった
ことについては、拙著『子規蔵書と『漢
詩稿』研究』（研文出版）を参照されたい。

（二〇一三年十二月、改稿）